

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

④7

リレーエッセイ「五葉山の魅力」に筆を執っていただけなにかという、千葉事務局長さんからの書状が届いたのは年明けのことでした。

昨年秋、仙台の東北学院大学のフォーラムで、目にかかったのが縁で、こうした依頼を受け取ることにしたのでした。

声をかけてくださったことは身に余ることでしたが、書信に記された千葉さんの思いの深さ、地域とそこに生きる人への深く温かい眼差しに、私自身の小ささを痛感して、とても筆を執るところに踏み出せませんでした。

さらに、皆さんが綴っ

てこられたエッセイを讀むと、私に何かを語る資格などないという思いが募るばかりでした。

幼い時に故郷を離れ、都市といわれる場所を転々として過ごしてきた私は、なんと干からびた虚ろな暮らしを積み重ねてきたものだろうか、リレーエッセイを讀みながら思ったものです。

五葉山にまつわるエッセイが輝いている分、己の感性が摩耗し、衰えていくことを思い知ることになったというわけですね。しかし一方では、これほど多くの人を惹きつけてやまない五葉山とは一体何なのだろうと、興味

を掻き立てられもしました。なにやら、すでに五葉山の「精霊」にとり憑かれてしまっていたのかもしれない。

そんなときでした。長年の友人から東京郊外の山、高尾山登山への誘いがあったのは。わずか五

いえば外国人の姿も多々、なるほど合点がいきました。

今回は六つあるルートのうち、沢沿いの道を行くことになりました。匂い立つような新緑の間を縫って歩いていると、鳥のさえずりが響き、沢の

同時、リレーエッセイで語られていた「五葉山の魅力」の一言ひとこととがまるで目に見えるかのように像を結んで立ちのぼって来るのでした。

ああ、いま私は東京近郊、高尾山中にいながら、あの住田の五葉山に近づいていくのだとワ

るといふ美感を取り戻しつつあることに気づくのでした。

同時に、リレーエッセイで語られていた「五葉山の魅力」の一言ひとこととがまるで目に見えるかのように像を結んで立ちのぼって来るのでした。

また見ぬ五葉山に背を押し登るようになった高尾山。今度は五葉山に赴いてその魅力にふれなければと想いが募ります。いざ、わが心の五葉山へ！

五葉山へのつゆめわ

神奈川県川崎市 木村 知義

九九だと、五葉山の高さの半分にも満たない高尾山ですが、これはもう登るしかないと思ってしまう。

流れの音、地中にすむ蛙のかわいらしい鳴き声に、全身が潤いを取り戻したかのように元気になるのを感じるのでした。

土に立ち、木々の濃いクワクワするようなときめきを覚えました。自然というものの不思議さ、いや、山の偉大な力と云うべきでしょう。

私鉄の高尾山口駅に降り立つと「ミシュラン三つ星の山」という表示が目に入りました。一体何事かと思ったのですが、あの「ミシュラン」で高尾山が本場に「三つ星」の評価を得ているのだと聞いて驚きました。そう

行き交う人同士が「こんにちば」とあいさつを交わし、早足の人は「お先に」ととぼをにかけて追い越して行きます。

人が土地との紐帯を失い、人と人の交感のぬくもりを感じる事ができ



聞いているのだと聞いて驚きました。そう

よく、緑と岩の間で水しぶきをあげる滝が心を洗います。まさに生きてい

るという美感を取り戻しつつあることに気づくのでした。



高尾山頂上の手前の神社で友人と (右が筆者)

【執筆者プロフィール】一九四八年生まれ。高校卒業まで大阪で育つ。七〇年NHK入局、アナウンサーとして主に報道分野で活躍。九九年から昨年三月までラジオ第一「ラジオあさいちばん」のアンカー。NHK退職後「21世紀社会動態研究所」(ホームページ: <http://www.shakaitodai.com/>)を主宰。〇六年から東北学院大学非常勤講師。